近代日本の「文化統合」と周辺地域
――「奄美」を事例にして

高江洲　昌哉

はじめに――問題の所在
1　「奄美」と沖縄の歴史的関係
2　ネーション成立前史の自立と既存の枠組みの再考
3　『南島誌』について
4　『南島誌』のレトリック――「皇化」をめぐって
5　鹿児島県の中の「奄美」
おわりに

はじめに――問題の所在

「市民社会は，その成立から現在に至るまで，絶えず排除と統合を繰り返してきた。この排除と統合のダイナミズムが，各市民社会の特質を形づくる重要な一要因でありつづけてきた」(1)とするならば，現在の日本における市民社会はどのような特質を持ち，どのような問題を抱え，現在の姿に至っているのか。また，より良き未来へ向かっていくためにどのような判断材料が必要なのか，本稿は，このような問題関心を基底部分にして作成したものである。ところで，日本で市民社会と

(1)　工藤光一「市民社会と『暴力的』農民―十九世紀フランスにおける『農民市民』の誕生―」（立石博高・篠原琢編『国民国家と市民』，山川出版社，2009年，116頁）。なお，本稿のもとになるシンポジウムにおいて，本稿叙述箇所の参考資料として，①「「シイエス」（カルチャル・スタディーズのこと，引用者挿入）の立場をとると「自称」していた大学院生が筆者に向かってこういった。「在日朝鮮人に生まれてうらやましいですね。ぼくも朝鮮人に生まれていたら，もっと研究が注目されたのに」筆者は未だかつてこれほどの暴力を知らない」を含む李建志の文章（『朝鮮近代文学とナショナリズム』作品社，2007年）と，②薬害エイズ問題に取り組みつつ国家への奉仕に主張を変えていった小林よしのりを「個の確立」に耐えられなかった若者たちを代弁したとする浅羽通明の文章（『ナショナリズム』筑摩書房，2013年）を紹介した。これら資料を紹介したのは，筆者が1990年代の反動として，現在の問題（ヘイトスピーチなど）があるのではなく，「多文化共生」を標榜していた時代のなかに現在の問題が内包されていたという見立てをもっているからである。それだけではなく，これら議論から想定される日本社会論に安易に還元することなく，日本社会の歴史的変化と特質から考えていこうという立場からの提言である。また，これらの資料は，私をどこに所属させて定義するかというアイデンティティの問題，私と彼らをどのようにアイデンティファイ（自己同一化）するかという「包摂と排除」の問題の一端を示しているといえる。よって本稿の課題にも通じると考えて紹介した。結論を先取りしていえば，「研究の先端」のように高次なもの，また「国家」（公）への自己同一化を求めるため，実際に存在している多様な横とのつながりを「忘却」することで，排除を達成しているという構図である。

表１　「奄美」の国民化年表

年代	空間	日本社会	「奄美」社会	奄美諸島の表記について	「奄美」を考える作品
江戸末期	封建的規制	身分制社会の変容			名越左源太『南島雑話』
1870年代 ～1920年代	都市と田舎の対立 （西洋化と日本の原型）	階層社会	離島苦社会		外部者による記録の時代『南島雑集』,『南島誌』 白野夏雲の仕事，笹森儀助『南島探験』 内部者による史書，都成植義『奄美史談』（1900年）
1920年代 ～1950年代	（平準化移行期） プレ開発の時代，都市化の進展，総動員	大衆社会	産業化と移動の時代	奄美大島という表記が代表性を持っていた時代	「奄美学」の黎明期 １）坂口徳太郎『奄美大島史』（1921年），茂野幽考『奄美大島民族誌』（1927年） ２）昇曙夢の諸作品（戦中～戦後） 「奄美学」確立期 ３）島尾敏雄の仕事
1950年代 ～2000年代	開発による平準化の進行（国土の均一化と過疎化）		「奄美」振興時代	復帰近辺から奄美という表記が代表性を持っていた時代	『沖縄・奄美と日本』（1986年） 弓削政己の仕事
2000年以降				「奄美」（奄美諸島）という表記を意識する時代へ（名瀬中心相対化の時代へ）	南海日々新聞社編『それぞれの奄美論』（2001年） 高梨修『ヤコウガイの考古学』（2005年） 高橋孝代『境界性の人類学』（2006年） 喜山荘一『奄美自立論』（2009年） 津波高志『沖縄側から見た奄美の文化変容』（2012年）

マイノリティーの関係を問うとき，多くは在日朝鮮・韓国人かアイヌ，沖縄などが取り上げられてきた。本稿は，このような先行研究の成果を引き継ぎつつ，「包摂と排除」という問題を（A）二項対立ではなく，（B）近代国家における文化統合の問題（地方における国民文化の統合過程という縦の関係）という長期的な変容過程という視点で，（C）かかる文化統合の過程において地域間の横の関係がどのように影響を与えてきたのかという視点を付け加えた内容になっている。これは社会がマジョリティとマイノリティという自明的な２つのグループによって成立しているわけではない現実社会の状況を踏まえてのものである。

本稿は，周辺の住民に焦点をあて，その国民化の過程を確認していくが，それは国民文化に収斂されない生活様式や歴史的経験を有する人々の自己認識がどのように国民的アイデンティティに接ぎ木していくのかを見ていくことで，上記の市民社会における包摂と排除の問題を解決するヒントになる視座が得られるのではと考えたからである。包摂と排除に大きな影響を与える「アイデンティティの定義」の問題を歴史的な視座から豊かにしていこうという試みである。

本稿が取り上げる具体的な地域は，現在，鹿児島県の一部になっている奄美諸島（以下，「奄美」と略記）である。この「奄美」を先ほど指摘した（C）の構図に当てはめて横のつながりを確認すると，「奄美」―鹿児島関係と，「奄美」―沖縄関係になる。「奄美」―沖縄関係については，「忘却

年代	「奄美」の特記年	国民化の構図	文化（国民統合をめぐる）構図1	文化（国民統合をめぐる）構図2	文化（国民統合をめぐる）構図3	「地域」文化（伝統様式）に対する視点
江戸末期		在地名望家による「地元」の歴史の編纂と日本意識の涵養（国学など）				
1870年代～1920年代	1879年（大島郡の設置）律令制になかった郡の新設	啓蒙的国民化	文明と風俗の対比	文明と野蛮，慰撫の視点	上からの注入／外部からの注入	教化
1920年代～1950年代	1945年 ～1953年（米軍統治） 1953年（日本復帰）	自発的国民化	・消失への抵抗 ・国民モデルへの志向	「愛郷心」と「愛国心」の両立を目指して	下からの反応／現地からの反応	保存と変容
1950年代～2000年代	1993年（復帰50年）		経済好調を背景にした「個性」の時代	「国民統合」の論理から経済の論理へ	イベントと「創造」の展開期	保存と活用
2000年以降	2009年（島津琉球出兵400年） 2013年（復帰60年）		「危機感」を背景にした「個性」の時代		イベントと「創造」の発展期	活用

と同胞意識」として捉える視点を提示した（高江洲：2014・B）。もう一方の「奄美」―鹿児島関係については，これまでも「反薩摩意識」「400年にわたる植民地関係」と言われるほど同一県内において，ある種の「差別意識」が持続してきたことを確認することができる。このように「敵対関係」が再生産されているが，これは薩摩藩の過酷な収奪及び差別意識が近代においても持続してきたという歴史認識に基づくものである。よって，「奄美」－鹿児島関係を沖縄との対比で言うと，「序列意識」と，それに伴い「奄美」側からは，薩摩を見返して，“より立派な日本人”へと向かう「逆転願望」があったといえよう。もとより，こうした図式的整理には零れ落ちるものがあることは当然である。

そして，この「当然」は，本稿に表記されている「奄美」というカッコ付き表記の説明につながっていく。外部の人間は，つい奄美群島の略称として奄美と表記するが，奄美大島以外の群島の人々にとって，奄美とは奄美大島のことであり，自分達の島が奄美と呼ばれることに違和を感じる人がおり，こうした奄美群島の総称（集団的アイデンティティ）をめぐる“争論”を見失うことがないようにという措置である。

表1は，現時点までも視野にいれて，近代日本における国民国家の形成過程と社会の変容，併せて「奄美」の歴史的流れ，「奄美」の自己認識に関する主要著作物を整理し，その時代ごとの特徴

をまとめたものである。それでは「奄美社会」内部は，どのような自己認識を持ち，どのような発言をしてきたのであろうか。明治初年には「島民ハ鹿児島アルヲ知リテ其他ヲ知ラズ」と表現されながら，国民統合の時代を経て，占領期には「大和民族として日本国民として生き抜いた」と表現するように，日本志向を強める過程を歩んできた。このように，敗戦・分断・復帰という流れの中で，改めて，日本ナショナリズムへの「再統合」（復帰）を図ってきたが，2000年以降，奄美大島の周辺部から,「無国籍」,「境界性」などと, どこにも属せない地域として自己表現する風潮が高まった（高江洲：2014・A)。それは対沖縄，対ヤマト向けの「奄美」の自己主張のように見えるが，実は群島内の文化的多様性を際立たせるものであり，奄美大島中心（名瀬中心）への異議申し立てという側面もあった。このように各島々の個性を表現する手段を得ようとする実践が起きただけではなく，2009年に島津の琉球出兵400年に際しては，鹿児島県の歴史認識を問うという市民団体が発足し，歴史問題が政治問題となる一幕もあった。

筆者は2009年の400周年記念企画の１つである『江戸期の奄美諸島』の書評を書いた際，先述の市民団体の活動を踏まえて「こだわりは対話の衝突を，無関心は鵜呑みや聞き忘れを生み出すことがある」（高江洲：2012）と書いた。ただし，この憂慮を訂正する形で，翌年あるシンポジウムで報告した際に，「「こだわり」に内包される非寛容への危惧が，先のような文章を書いたことは確かですが，その後，つらつら考えていることですが，こだわりをもちつつ，言葉に対する洗練さ，相手の感情を思いやることが出来れば，対立ではなく，こだわりを持ちつつ共有部分が増えてくるのではないかと考えています」（高江洲：2013）という考えにつなげていった。そこには，歴史認識の問題と我々意識の問題に共通する“排除の構造”を好転させるにはどうすればよいのかという考えが，ここ数年強くなってきたことが影響したのかもしれない。

このように筆者は，どのように多様な個の参加を許す，緩やかな連帯を目指すことができるのかということを考えてきたが，十分な語彙と展望を見つけるには至っていなかった。今回，このシンポジウムを開催するにあたり，勉強会を数回開いてきたが，９月26日の勉強会で境界／広域における集団的アイデンティティを「連帯意識」に互換できるだけの想像力が必要ではないかという議論になり，この思想に共鳴し，この点を積極的に考えるようにしてきた。ただし，この勉強会では，同時に「連帯意識」もある契機で「敵対意識」に転回し，共存してきた“我々 ”を排除するようになるという点にも注目する必要があり，楽観の許されない実践が必要ということを確認してきた。

以上の点を踏まえて本稿では，⑴国民国家において均一な国民像が形成されるという歴史的言説を地域の視座から相対化をおこない，⑵中央と地方という縦関係だけでなく，横のつながりがもたらす“地域個性”に注目する。以上の点を踏まえ，⑶国民国家形成期の「奄美」に注目し，均一な国民意識の下層にある地域アイデンティティの多様性を感じ取り，集団的アイデンティティを“連帯意識”と互換するような柔軟なつながりであると自覚し，それを“排除の構造”に転化させないための思想訓練の素材を提示するという意味あいを持たせて論を進めていく。

1 「奄美」と沖縄の歴史的関係

沖縄と奄美は，古琉球時代（島津の琉球出兵以前）は，同一版図で，島津の琉球出兵後，奄美諸

島は薩摩藩の直接支配を受け近代に入り鹿児島県の一部になる。かたや琉球王国は間接支配（または日・支両属時代）を経て，近代に入り，所謂琉球処分を経て，沖縄県となる。両者は第二次世界大戦の結果，ともに米軍統治下に入るが，奄美は1953年に，沖縄は1972年に返還されている。

先に同一版図と軽く述べたが，この点に関しても，従来は琉球王国の統治範囲の北上と考えられていたが，近年，吉成直樹氏の業績（同氏編著による『琉球王国の誕生』）のように，これまで琉球王国（沖縄本島）による，奄美諸島への統合というプロセス（南進論的解釈）から，奄美諸島から沖縄本島というプロセスで理解しようとする動きも起きている。

また，県史は，県域から越境することはほぼないが，最近刊行されている『沖縄県史』の前近代部分では，「奄美」を含めて叙述するようになっている（弓削政己「奄美島嶼の貢租システムと米の島嶼間流通について」，『沖縄県史各論編４近世』，2005年）。これは県域という近代に創造された境界を区分とする帰属意識の再考の一環である。それだけでなく「奄美」においては，名瀬を中心とする奄美史から奄美諸島史のような視点の転換が起きている。同じように，琉球・沖縄史においても，那覇中心史観を批判し，先島なども視野にいれた沖縄史の提言など，ここ近年で大きな地殻変動が起きている事も確かである。

要は，それぞれの場所から歴史像を打ち立てていこうという動きであり，換言すれば「○○中心史観」を裏付けてきた展望台を批判するために，複数の展望台を設置しようとしている状況といえる。

2　ネーション成立前史の自立と既存の枠組みの再考

これまで述べてきた前提を踏まえて，日本近代史（文化史）の時期区分と，「奄美」の歴史学・民俗学など自己認識に関わる年表（表１）とを比較しながら考えていきたい。岩波講座『近代日本の文化史』で1920 ～ 30年代を扱った第5巻は「再編されるナショナリズム」と巻名をつけており，この時代の特色を案内チラシによると「二〇－三〇年代の資本蓄積の高度化，植民地帝国への歩みとともに，明治国家のもとで形成されたナショナリズムは再編成を迫られる」と，該当する時代を位置づけている。ただし，残念なことに第１巻から第４巻までの巻名に「再編成」の対象となるナショナリズムの成立は謳われていない（ちなみに第１巻は「近代世界の形成」，第２巻は「コスモロジーの近世」，第３巻は「近代知の成立」，第４巻は「感性の近代」になっており，ナショナリズムが明治国家のもとで形成されたのか巻名からうかがうことはできない。そもそも，「明治国家のもとで形成」のようにナショナリズムが「上から」形成されたような印象を与える語句をつかうことの可否，または「明治国家のもと」というように明治時代に形成された印象を与える語句の可否など，いくつかの問題を抱えていると思う）。ただし，年表で確認できるように，1920年代から「奄美」でも学問的な形で自己認識が探究されており，当時の時代状況を踏まえて，「個性化」と「日本への回収」という特徴がみられる。

この点と関連するが，一国史の再考を提示するテッサ・モーリス＝スズキが「国家の外部が規定されると，それを文化的に色づけようとする時代が始まった。すなわち，周辺の社会を溶け込ませ，

統合され，中央集権化されたネーションの公式に染め上げようとする試みである」[(2)]という指摘も参考になる。もっともこのような叙述は，周辺民衆の屈折を含んだ，抵抗と包摂の歴史よりも「統合」の力が強く見え，テッサ・モーリス＝スズキ氏自身の意図と叙述が乖離し，本人の試みを遠景に退けている感も在る。本稿はいささかなりとも，テッサ氏の目的をより豊かにしていく作業につながっていくものと位置づけている。

日本におけるナショナリズムの問題を考える際，福沢諭吉の「日本にはただ政府ありて未だ国民あらずと言うも可なり」(『学問のすすめ』，1864年）や，政教社グループの陸羯南「国民主義と文化とは両者密着の関係を有し，若し文化にして尽く自国特有の性質を失ふに至れば国民主義なるものは忽ち消滅し，一国の元気復た振ふべからざるに至らん。…蓋し愛国心なるものは常に其源を自他を区別する所の国民主義に発するものにして，而して国民主義は其元素を自国特有の文化に資するものなり」(「日本文明進歩の岐路」『全集』１巻，1888年）の文章を引用することで，明治初頭を「国民」という枠組み成立史として理解しがちであるが，こうした思想と現実的展開には違いが存在することは確かである。もう少し，日本の政治史・制度史に即して用語を吟味すると，近代国家建設において「国民化」という一般分析的な用語で呼ばれるような政策は，「皇化」という用語になるし，文化に対応するものは「人情・風俗」と表記されている。それだけでなく，地方制度成立期には「人情・風俗」は，「民度」という序列的な形で再編されていくようになる。しかも，「民度」が測定可能なものへ変化していく過程である（高江洲・A：2009)。つまり，単純に地方統治も国民統合装置というだけでなく，様々な論理を内包して進展していたのである。そうすると，前述の『岩波講座　近代日本の文化史』で述べた批判とは逆になるが，明治初年を1920年代に成立した考え方で理解する「ナショナリズム形成」前史として整理するだけではなく，それ以外の論理にも目配りする必要がでてくると思う。「ナショナリズム」という枠組みを再考し，前史を，其の時代特有の論理及び可能性をみつけだすことで，明治初年を「ナショナリズム形成」前史の位置づけから自立させることも可能ではないだろうか。本稿は，このように歴史像の読み替え／歴史の位置づけを再考することで，ナショナリズム史観の枠組みを自明視する既存の文化の枠組みを柔軟に捉える視座を養い，前述の課題に応える意見を提示したい。

3　『南島誌』について

本節では『南島誌』という従来余り注目されてこなかった資料を利用して，前述の問題に取り組んでみたいと思う。『南島志』を含めて「奄美」に関する幕末・維新期の資料として有名なものと

(2)　テッサ・モーリス＝スズキ『日本を再発明する』(以文社，2014年，30頁，ちなみに同書の英文原著刊行年は1998年である）がある。同氏にはそれ以外にも，「国民国家の形成と空間意識」(『歴史を問う３　歴史と空間』2002年，岩波書店）がある。また，出版年から考えると，アイヌの立場から描いた『辺境から眺める』(みすず書房，2000年）が，本稿で引用したテッサ氏の意図を叙述の形で一致させたものになるであろう。また，先に紹介した「国民国家の形成と空間意識」では，英語圏の著者としてその教養をいかして，日本に限定されない形で，国民国家の空間について議論をしている。

表２　幕末明治初年の「奄美」関係資料

書名	著者	作成年	作成経緯	公開経緯	坂口徳太郎『奄美大島史』（1921年刊行）の参考文献で取り上げられているか	現在利用可能なテクスト
南島雑話	名越左源太（薩摩藩士）	1850年代	遠島にともなう生活記録	草稿等各種本がある。また，鹿児島県庁，大島島庁本など異写本がある。1933年の永井竜（龍）一による自費出版本（白塔社版）以降，『南島雑話』の利用度が高まった。	○	『日本庶民生活史料集成』第1巻，東洋文庫，『南西諸島史料集』第２巻
南島雑集	久野謙二郎（大蔵省官吏）ほか	1874（明治７）年	地租改正未実施にともなう勧業調査（古文書の翻刻）	未刊（内閣文庫所蔵），戦後松下志朗が『福岡大学文理論叢』（1968年）に翻刻する。	—	『奄美史料集成』
南島誌	久野謙二郎（大蔵省官吏）ほか	1874（明治７）年	地租改正未実施にともなう勧業調査（実地調査記録）	未刊（内閣文庫所蔵），1954年に柳田国男写本を永井龍一が奄美社より翻刻資料として刊行	—	『南西諸島史料集』第３巻
トカラ関連						
七島問答	白野夏雲（鹿児島県勧業課吏員）	1884（明治17）年	地押調査の予備調査	未刊，鹿児島県立図書館所蔵写本を永井龍一により1932年刊行	○	『南西諸島史料集』第１巻
島嶼見聞録	赤堀廉蔵（鹿児島県地租改正掛）ほか	1885（明治18）年の復命書，1887（明治20）年刊行	地租改正の再調査の一環（業務報告書），鹿児島県庁	刊行	○	『南西諸島史料集』第１巻

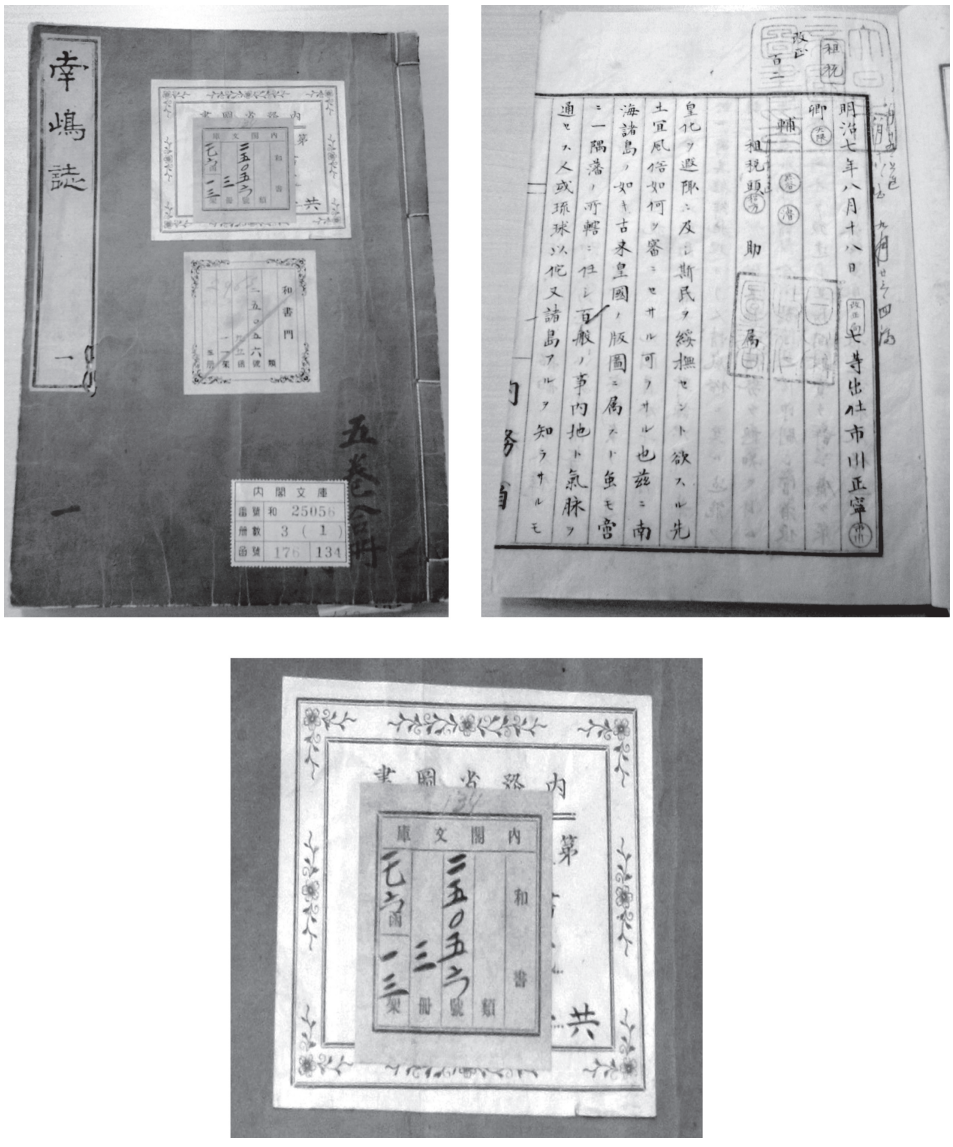
して，**表２**で紹介したように３点の書物がある。『南島雑集』が史料集であるならば，本稿でとりあげる『南島誌』は「其経緯地理ヨリ人情風俗ニ至ル迄能ク詳審ヲ尽シ人ヲシテ其地ノ情勢ヲ想知セシム」と書かれているように奄美諸島に来島した政府役人の「奄美」観や「奄美」の政治的位置づけを述べており，政策的テキストとして扱うことが可能だからである。さらに言えば，「島誌ノ以テ其情勢ヲ審ニスル無キニ出ツ」というように，「奄美」を知るための判断材料が政府になかったということが彼ら官吏を派遣する一因であった。ちなみに，彼らを派遣したのは，大蔵省租税寮である。このことから分かるように，単純に島の事を知るためではなく，収税法の古書も併せて収集したように，税収確保（国富化）が本来の目的である。

このように大蔵省主導で派遣された「奄美」視察の成果である『南島誌』であるが，現在国立公文書館（内閣文庫蔵）で見ることができる原本は，内務省図書を示す貼紙や本文自体も内務省罫紙に書かれているので，久野らが大蔵省租税寮に提出したオリジナルの資料ではなく写本であると思

われる（**図1参照**）。

この資料がいつ，歴史史料として「知の財産」として共有されるようになったのか，表2で確認できるように，戦後になってからであり，戦前までは知られることはなかった。その意味では，歴史認識の情報源という役割を作成時から現在まで担っていたわけではない。もちろん，多くの古典がそうであるように，再発見されて，「正典化」の場所に置かれるとするならば，『南島誌』はその途上にあるといえる（「奄美」研究における「正典」は『南島雑話』であろう）。本稿では，繰り返し利用される知的資源として『南島誌』を位置付けるには限界はあるが，ナショナリズムの問題として近代「奄美」の歴史的位置づけを考える際には有力な歴史的情報であると位置づけている。

図1 『南島誌』（国立公文書館内閣文庫蔵）



4　『南島誌』のレトリック――「皇化」をめぐって

⑴　国民化と「皇化」のズレ

『南島志』を上司に提出する際のカガミ（添書き）において「奄美」は，「古来皇国ノ版図ニ属スト雖モ啻ニ一隅藩ノ所轄ニ任シ百般ノ事内地ト気脈ヲ通セス人或琉球以他又諸島アルヲ知ラサルモノアリ」と位置づけている。これだけの文章を読むと，「奄美」の人々は，琉球以外の島々のことを知らないというように読めるが，『南島誌』の緒言には「島民ハ鹿児島アルヲ知テ其他ヲ知ラス内地ノ人モ南洋ニ琉球アルヲ知テ又他ノ許多ノ島嶼アルヲ知ラス」と述べているので，元は相互の無知を述べている文章であった。更に言えばこの文章からは，バラバラになっていた人々を国民として一体化させていこうとする国民意識形成期の初期段階を示す文書の好例といえよう。

このようにカガミと緒言には微妙な差異，読み替えが存在するが，もう一点重要な違いがある，緒言には「(島々が遠く離れているので）世態ノ沿革常ニ内地ニ副ハズ故ニ人情風俗モ亦内地ト異ナリ」という人情風俗の違いを指摘するだけであったが，カガミには「皇化ヲ遐陬ニ及シ斯民ヲ綏撫セント欲スル先土宜風俗如何ヲ審ニセサル可ラサル也茲ニ南海諸島ノ如キ古来皇国ノ版図ニ属スト雖モ…百般ノ事内地ト気脈ヲ通セス」と述べている。これら「奄美」観と統治方針から特徴として下記３点ほどあげることができる。

１）古くからの版図であるにもかかわらず「内地ト気脈」が通じていないという点

２）そこで，改めて「皇化」を及ぼす対象になっているという点

３）「綏撫」するために，沖縄や植民地での旧慣調査とつながるように調査が必要という点

「国民意識」とは，公定イデオロギーを注入するものでありながらも，形式上は自発性を求めるものではあるが，明治初年においては，「皇化」というように，恩恵か自発かは曖昧な表現（もしくは，日本的な国民化の思惟方法を表現している）で，ある空間とそこに住む人々と「日本／天皇」との関係を著わしている。要は，「皇国ノ版図ニ属シナガラ」皇国の民としての意識のない「奄美」の人々と言う認識を示していたことを指摘することができる。ただし，「奄美」については，「物産ノ盛大ヲイタサハ実ニ国家ノ鴻益タラン」(開発地としての関心が注がれている）というように,「奄美」は勧業政策上，日本にとって重要な場所であった。

それだけでなく，薩摩藩の土地でありながら「内地ト気脈ヲ通セス」と言われ，勧業政策上日本にとって重要な地でありながら，結果的には人情風俗を異にする土地と位置付けけられている。さらに，地方制度成立期においても，条約改正を視野に全国同一の地方制度の施行を目指しながらも，同一の地方制度を志向することのできない「民度」の遅れた土地として位置づけられることになった。

⑵　方言をめぐるレトリック

第三章風俗にある言語の項目では，以下のような内容になっている。

言語ハ都テ内地ト同シカラス其同シキモノハ十中僅ニ一アルノミ而シテ嶋語ハ其濫觴得テ知

ル可カラスト雖トモ或ハ上古以来自然ニ存在スルモノニシテ寿永ノ末平氏ノ残党本島ニ逃匿シ当時ノ都言ヲ雑ヘ其後八十余年ヲ経テ文永三丙寅年琉球ニ入貢シ大親役……等ヲ置キ彼我ノ人民互ニ往復シテ又其言語ヲ雑ヘ其後三百四十余年ヲ経テ慶長十四乙酉鹿児島藩主島津氏ノ為ニ襲ハレ爾後其版図ニ入リ慶長十八癸丑年鹿児島ヨリ代官及ヒ附属数名ヲ遣シ連綿今ニ至ルマテ絶ヘス因テ又其国語ヲ雑フ此数種ノ語ヲ合シテ一個ノ島語ト為ル本邦ノ古語ナルモノアリ琉球国語ニ類スルモノアリ従来ノ鹿児島語ニ同シキモノアリ唯上古純粋ノ島語ノ如キ漢字ハ勿論仮名字トイヘトモ之ヲ書記スヘカラサルモノアリ然レトモ島務ヲ奉公スル与人横目（戸長／副戸長）等ハ皆一般ニ鹿児島語ヲ以テ談話シ得ヘシ其他僻村ノ野民及ヒ児童婦女ノ言語ニ至リテハ十ノ一尚解シ易カラス喜界島徳之島沖永良部島与論島ノ諸島モ其原因本島ニ同シカルヘシト雖トモ言語中又多少ノ差異アリ

ナショナリズム研究において，ナショナリズムの創出に言語学がはたした役割はよく知られているが，言語学成立以前の，ナショナリズム的知識が未定形であった頃の官吏が記した文章からは，言語の系譜的な言及ではなく，「雑へ」という交雑的な言及であることが確認できる(3)。それでは，次に言語学成立後の「奄美」の方言の位置づけと「奄美」の位置づけを考えてみたい。昇曙夢は『奄美大島と大西郷』（1927年）の序文において「殊に言語の如き，日本内地では既に死語となつて，国学者の間にすら意義が全く解らなくなつてゐる古代和詞が，大島や琉球では現に生きて使われてゐるので，時として我が学会に意外な発見を齎すことがある」と「原日本」としての「奄美」を指摘している。『南島誌』の記述と比較してみると容易にわかることだが，『南島誌』に見られた言語の交雑過程と言うものが取捨され，日本の古語のみが特筆されている。このように言語学や民俗学で「奄美」を語る際に，原日本論を軸にして論述するスタイルが確立したといえる（こうした昇の成果は先に述べた，1920年代からのナショナリズム再編の成果－言語の混淆性が研究目的の言外に置かれていった―といえよう。もしくは琉球語も大和古語に位置づけられていくので，『南島誌』がもっていた言語の広域的交雑性が，日本語の古層的理解に一元化して理解していく知的枠組みに変化していったといえよう）。

(3)　ただし，同時期の「琉球処分」過程において，例えば琉球処分官の河原田盛美は，明治８（1875）年に松田道之の命令に従わない琉球藩の官吏に出した書状で琉球が「日本属藩ノ証」として16か条あげているが，そのなかの１つは「言語文字同ジ」であった（喜舎場朝賢『琉球見聞録』，1914年，57頁）。また同年９月に松田道之名で出された琉球からの嘆願に対する答弁書にも，琉球は日本の「古語」や「支那語」が混じっていることを認めつつも「其古語ノ存スルハ則チ我カ国ノ人種タル一証ナリ語調語音語章ニ至テハ交際ニ依テ自然変移スルモノニアラス…琉球人民ノ語調ヲ聴クニ純然我カ国ノ語調ニシテ語音ハ薩摩ノ語尾ナリ語章ニ至テハ…我カ国語ノ証ナリ…地理人情風俗言語ニ就テ論スルモ我カ国ノ版図ナリト謂フ所以ナリ」（『明治文化資料叢書４　外交編，琉球処分』，1987年，138頁）と，「大和」と琉球の言語的同一性が強く出ている。これら琉球処分時の言語観は，『南島誌』に見られる広域的な「雑へ」の論理ではなく，一方向に遡及していく「起源」の論理といえる。この時期は，個人または政策の違いによって言語の雑居性または同一性が表明されるように，言語の祖型を根拠にして統合していく政治的論理は確立していなかったのかもしれないが，のちに「言語の同一性」はナショナリズムと結びついた「近代的学問」の発達のなかで探究／補強されていくのであろう。

5　鹿児島県の中の「奄美」

以上，近代国家建設期における「奄美」への言及をみてきたが，その後の展開を簡単に述べると，「奄美」は町村制の未施行地になり「民度の遅れた」土地と評価され，沖縄県及島嶼町村制が施行される。このように「内地のなかの異法域」を歩むようになり，1920年代に普通町村制の施行となる（内国化の完了）。その間は「民度」向上，国民化への促進ということになる（高江洲：2009）。

このような近代「奄美」の流れを要約すると，大島県設置構想→町村制の未施行地→独立経済と，勧業と地方制度特例の揺れ動きであり，単純に経済的搾取で突き進んだわけではない。それにもかかわらず，差別史観が再生産されたのは，独立経済の失敗によるところが大きい。もちろん，このことは「奄美」だけの問題ではなく，鹿児島県の近代化という視点も大事であるが，鹿児島の近代化の問題と「奄美」の近代化を十分に組み込んだ議論というものは今のところ，十分にできてはいない。

この点と関連するが，「どの地域の農村から近代を見通すかでイメージが異なるはずで，特に畿内や関東の非領国地帯がそのまま明治政府の基盤になるということが重要ではないかということです。それは薩摩や長州とはちょっと違うわけです」（「小平地域の近世･近代以降期をどう考えるか」（『小平の歴史を拓く』3号，2011年，39頁）という久留島浩の発言に留意する必要があろう。国民国家において「均質な空間」は作られていくと言われているが，地域から「近代」を考える際に，先に提示した国民国家の建設期という時期の問題と，こうした地域間の格差発生の問題を踏まえる必要があろう。換言すれば，日本は東アジアの中で近代化をなしとげたと言うけれど，日本国内が満遍なく一律に近代化に沿って変化を遂げたわけではない，高度経済成長以前までの不均衡に近代化していたという日本像に留意しておく必要がある。

もちろん単純に搾取されて「暗い近代」だけでなく，「奄美」においても大島紬やユリ根，鰹節産業の発達など産業化は起きている。そうではあるが，地方制度特例の終える1920年代から「奄美」も経済不況に陥り，沖縄同様経済復興が叫ばれるようになる。

以上確認したように1920年代は，不況という経済的な問題も起きているが，もう一方で，最初に述べたように「ナショナリズムの再編」といわれる近代的な学問知識を活用した「自意識」研究も盛んになる時期でもある。「奄美」においても沖縄と同様，民俗学・言語学など郷土を対象にする学問が発達し「日本人化」への再編が図られるようになる。「日本人化」再編をはかる切り口の１つに奄美諸島に遠島になった西郷隆盛と「奄美」の精神的つながりを宣揚する言説というものがある。例えば，1927年は西郷没後50年ということで，西郷に関する言及が増えている。例えば奄美社から発行している『奄美』では行幸記念と合わせる形で西郷没後50年を記念している。ちなみに昇曙夢は，自身の郷土研究の成果である草稿が紛失し「再び着手する勇気もなく最近に至つていたが，偶々南洲翁五十年祭が近づゐたので，昨年来郡有志の切なる勧告」があったので，「再びこの事業」（＝郷土研究）を思い立って『奄美大島と大西郷』を刊行したと序文に記している。更にこの序文において昇は「本書は純然たる歴史でもなければ，単なる伝記でもなく，謂わば奄美大

島の民族史乃至文化史を背景とした南洲翁の遠島物語とゐつたようなものである」と述べている。このような文言は西郷を戦略的に利用したとも言えなくはないが,「奄美」の生活相に「原日本」を見出す論理と同様，西郷隆盛は「奄美」と日本を結び付ける重要な人物（概念）として位置付けており, 西郷顕彰は「奄美」と日本を架橋する実践であったといえよう(4)。また島外の横山健堂は「大西郷の身辺に集まり，先生を尊敬した主なる人々は，概ねそれ等の血統の人々であった。これ等の人々は島の文化の第一線に立ち島の進展に尽力したもので，今日もなおその情勢の延長とみるべきであろう。此の事実は文化史的に見ても興味の深いことであります」（173頁），「和泊の学校は，即ちまのあたり大西郷の遺沢を見たのである(5)。先生は，島の為に，精神的にも救世主であらねばならぬのである」（190頁）と述べている。このように西郷を顕彰し, 西郷に象徴される価値観を「奄美」の住民が体現しているという言説は戦後も繰り返し述べられている。もちろん，全「奄美」で均一的にこの価値観が共有されているとは言わないが, このように西郷に感化された「奄美」の人々が西郷精神の体現者であり，それを再生産させていく言説が存在していることを指摘し，併せて言説の背景に精神的な「逆転願望」が現れているというのが筆者の見立てであり，西郷隆盛は鹿児島―「奄美」の関係の象徴として位置付けることができると思う（次頁**表３**参照）。

(4)　松尾須美礼氏は「『奄美大島と大西郷』における奄美と日本」(『比較民俗研究』18, 2002年）において, (１)「(カトリック排斥が…引用者挿入）激しい排撃運動となって噴出した。“国家”というものに対し，本土の人々よりもさらなる忠誠を示すことを求められ，奄美的なものを捨て去り，本土並みの生活を手に入れることを脅迫されてもがく故郷奄美に対して，昇は何を訴えかけようとしたのか」（106頁）また，（２）「西郷を反省させることによって，…奄美の人々の外見的特徴が，民族を異にしていることよりも，その虐げられてきた歴史に原因があるとした。そしてその圧制の歴史のなかで失った民族の誇りを取り戻すことを訴える一方で，大和民族の中における居場所も模索した。それは時代が“奄美民族”として精神的な独立をすることに価値を置かせず，大和民族として一致団結することを奄美の人々に強制的に望ませていたからである。…その尊厳を踏みにじられてきた，厭迫の時代を見つめなおす作業を必用とした。西郷が持ち出されたのは，この複雑な思いを奄美内外に訴えるための，昇の作戦だったと言えよう」（108頁）と戦略論的な形で，昇の『奄美大島と大西郷』を分析している。確かに，松尾氏が指摘したように『奄美大島と大西郷』は「戦略としての“大和主義”」に分類できるかもしれないが，戦後の昇の動向を考えると，このように「大和」を戦略として「片づける」ことができるのかどうか疑問に思う。『奄美大島と大西郷』は生活で慣れ親しんだ奄美的なモノと学習し価値化した日本的モノを架橋する，両存させようとした実践の成果なのではないか。

(5)　先田光演編『西郷隆盛と沖永良部島』所収「沖永良部島に於ける大西郷」より。横山健堂（山口県，1872～1943年，講演当時・駒澤大学教授）は，1915年に『大西郷』を刊行し，その縁もあって沖永良部島の教育会から招待されて，沖永良部で講演をしている。ちなみに,「沖永良部島に於ける大西郷」を含む『文久二年　四大事件記念講演集』(西郷家編輯所，1931年）とは，文久２（1862）年から70年を迎える昭和６（1931）年に，文久２年に起きた薩摩藩にとっての四大事件（島津久光東上，西郷遠島，寺田屋騒動，生麦事件）を，西郷侯爵邸で講演したものを１冊にまとめたものである。

表３　奄美諸島と西郷隆盛に関する主な文献リスト

昇曙夢『奄美大島と大西郷』（春陽堂，1927年，新人物往来社，1977年）
山田尚二『西郷隆盛と奄美』（新人物往来社，1986年，初刊は私家本か）
徳之島
西郷隆盛百年祭記念委員会編『徳之島と西郷隆盛』（西郷隆盛百年祭記念委員会，1977年）
増田宗児『西郷隆盛と徳之島』（浪速社，2006年）
『徳之島郷土研究会報』13号（1988年），14号（1988年）
沖永良部島
先間政明『西郷隆盛と沖永良部島』（八重岳書房，1982年）
本部廣哲『偉大なる教育者西郷隆盛沖永良部の南洲塾』（海風社，1996年）
先田光演編『西郷隆盛と沖永良部島』（和泊西郷南洲顕彰会，2011年）

おわりに

「奄美」の文化統合過程を取り上げた本稿において，まずはじめに『南島誌』のように国民国家成立期に，「周辺」に位置する人々の風俗を描いた，上からの視点で描かれたテキストを素材に，ナショナリズムの統合と創出の一端を描出してみた。そこには，国富による注目，ただし国民国家を基盤としない勧業政策の論理の貫徹を指摘することができる（「皇化」と「文明化」のズレが今後の課題であろう）。こうした住民不在で国家に包摂していく資料が書かれていく次の段階として，地元の住民を主体にして，資料の発掘，または資料の読み替えを目指す，国家への包摂を目指していく（国民意識の存在を正当化していく）資料が生産されていくようになる（民俗学の実践など）。

つまり，地元意識と国家への統合を目指していく過程とそれを媒介とする書物が生産されていく過程において（１）主語の問題が成立していく（周辺の住民を国民として叙述しているかどうかが，一つの判断材料になるであろう。もっともこれは視点がないから駄目というわけではない）。こうした「主語の問題」を踏まえて，（２）現地においても国民統合の言説がつくられていく。この国民統合（我々意識の創出と共有）の過程においても，国家（中央）と地方のように直進的な視点が継承されていき，さらに，マイノリティにおいてはマジョリティの設定した文化の枠に当てはめて議論を展開させていくので，他者性を喪失させていく過程であったといえよう。

ただし，「奄美」を事例にしていえることは「奄美」（マイノリティ）―「内地」（マジョリティ）という一元的関係だけでなりたっているのではなく，「奄美」―沖縄という関係が不可視化されていく過程でもあった。つまり，文化統合とは地域住民の複合的関係の再編過程ともいえる。このように，文化統合とは，垂直的な関係だけではないので，文化統合を横のつながりで考えるとどのようなことが言えるのか。まず沖縄県と「奄美」の関係について述べると，日本の中の位置を模索することで，その結果，共に相手を「忘却」するという関係が起きてくる。次に，鹿児島県と「奄美」の関係は，「周辺化」した鹿児島県によって「奄美」の「周辺化」が促進された結果，ある意味で前近代における序列意識の近代的再編が起きてきたといえよう（かかる事態による「周辺性」の消去（忘却）と国民化への強調）。こうした横の関係の変容と，表１で確認したような「奄美」の時

代経験を踏まえると,「奄美」の人々も単なる客体ではなく,仲間であると同時に他者でもある「我々」と「彼ら」の線引きを行っていたといえる（単純な客体ではない）。ある意味で,「自意識」とは縦と横の関係を明示／不明示にする中で作られており，さらにその当時の人々を取り囲む社会状況や価値観のなかで「自意識」は作られているといえよう。横のつながりの同時進行的変容が，集団アイデンティティ（国民意識の下部層）にも影響を与えているのではないだろうか。

以上の点を踏まえて，本稿の最初の問題（市民社会における排除と統合の特質）にもどって，やや一般的な形で論点を提出すると，「包摂」と「排除」を可能にするには，私たち一人ひとりがマイノリティとの関係性やマイノリティ性などを「忘却」し，“創造された”マジョリティーへの同一性を共有することで「包摂」と「排除」を行ってきたのではないか，こうしたプロセスを批判的に検証する思考軸をどのように個々が作り育てていけるかという点であろう。

つまり，未来を展望するために自他関係の問題を鍛えていくには，同質性を前提としない我々意識の共有は可能かということを，再吟味していく知力を養っていくことが，私たちの責務ではないかと考える。

（たかえす・まさや　神奈川大学外国語学部非常勤講師）

【参考文献，本稿に関係する高江洲の論文等―「奄美」関係】

1：『近代日本の地方統治と「島嶼」』（ゆまに書房，2009年・A）
2：「奄美独立経済再考」(『第８回　韓日民衆史研究者ネットワーク形成のためのワークショップ報告集』，2009年・B）
3：「書評　『江戸期の奄美諸島』」（『法政大学沖縄文化研究所所報』70号，2012年）
4：「沖縄地方制度研究と島嶼地方制度研究を往還して」（琉球大学国際沖縄研究所『人文・社会科学を主体とした先端的・沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジェクト成果報告書』Vol. 2，2013年）
5：「奄美諸島における「周辺型国民文化の成立と展開」（『第13回　韓日民衆史研究者ネットワーク形成のためのワークショップ報告集ー近代移行期における東アジアの民衆のあり方を比較し，連関を考えるための国際的ネットワーク構築のために』，2014年・A）もっとも，この報告論文は2015年に刊行予定の歴史問題研究所（韓国民衆史班）とアジア民衆史研究会（日本）編の論文集に収録される論文の予備原稿という性格のものである。
6：「鶏飯をめぐる政治文化史」（シンポジウム「東アジアから見た沖永良部島」，知名町中央公民館，2014年９月20日・B）本シンポジウムは名古屋大学・池内敏を代表とする科学研究補助金・挑戦的萌芽研究「国境未満の異文化接触／衝突／浸潤」の成果。

【付記】　本稿は，科学研究補助金・挑戦的萌芽研究（池内敏代表）「国境未満の異文化接触／衝突／浸潤」及び「法政大学大原社会問題研究所研究補助金」による「奄美」調査の成果の一部である。